



やさし十

【広島県】悦喜 未奈子 24歳

受験生真っ只中だった時のこと。試験が3日間ある中で、緊張でいっぱい初日の試験を終えた帰り道のことだった。一緒に試験を受けた友人2人と電車に乗り、雑談しながら帰っているとき、急に私の視界が揺れた。前のめりにたおれて、そこから記憶がない。意識を失ってしまった。

おほろげに意識が戻ると救急車の中。だれかが私の手を握っていてくれた。見知らぬ若い女性だった。再び意識を失い、次に目覚めたのは病院的なベッドだった。母も来ていて、ことの顛末を説明してもらった。

電車の中で私が意識を失ったあと、車内で非常停止ボタンが押された。友人の1人が、私の携帯

電話から母に連絡してくれたらしい。そして、車内にたまたま同乗していた看護師さんが、救急車が到着するまでの間、応急処置をしてくださったそうだ。一緒に救急車に乗ってくださり、手をにぎっていてくれたのは、この方だった。

おほろげな記憶しか残っていないが、救急車の中でその看護師さんと話したような気がする。「大丈夫ですからね」と声を掛けてくれた。彼女が私服で、コートを着ていたのを覚えている。きつと休日でおフの日だったのだろう。そんな中でも看護師として、私を助けてくれたのだと思うと、申し訳なさや感謝の気持ちやらで胸がいっぱいになった。

病院で意識も戻り、回復したのでも、試験も次の日から出て受けた。最後までなんとか受け切ることができ、ほっとした。

後日、助けていただいた看護師さんからお手紙が届いた。私が救急車の中で、一緒にいた友人たちや、他の乗客に迷惑をかけてしまったと話していたらしく、意識がなく、私は覚えていない、そのことを「優しさ」だと書いてあった。私は、彼女こそが勇氣と優しさの象徴だと思った。

後に母から、その看護師さんがこの一件で表彰されたと聞いた。今でも、救急車の中で握っていたくれた手のぬくもりを覚えている。